ネパールの風

98ネパール日記　その・1

通算山行N０　１２５Ｓ　　報告者　後藤　隆徳
年月日　　９８・０４・２３～０５・０６
山行名　　創立５周年海外記念登山
山　名　　ネパール・ヒマラヤ　ランタン山群　ヤラ・ピーク（５５２０m）
参加者　　後藤隆徳（５１）、高岡八千代（６０）、加藤秀子（４９）、今泉良三（伊豆ハイク・三島労山、５４）

第１日目　４月２３日（木）晴　　三島～成田～ホンコン～カトマンドゥ

ホンコン空港のシャワーは水だった

新幹線三島駅始発に高岡、加藤、後藤の３名が乗車。出発に相応しい気持ち良い晴天だった。大根田、高岡、岡、来生、御宿、後藤、加藤（長女）が見送ってくれた。

荷物は、背中の大型ザックと手持ちのサブザック。大型ザックにはアタック用のプラブーツ、トレッキング用の革軽登山靴、ピッケル、アイゼン、冬用ヤッケ、着替えなどで２５Ｋｇになつた。

前回、ヨーロッパ・アルプスの時はそれにテント、シュラフなどが入り４０Ｋｇ以上だったからマアマアだろう。サブザックにはお金、パスポート、カメラ、フイルムなど、すぐ使用するものを入れた。

女性のザックにはこれらに梅干し、沢庵、茶漬けの素、つまみ、缶詰、など現地で入手出来ない食料が用意された。

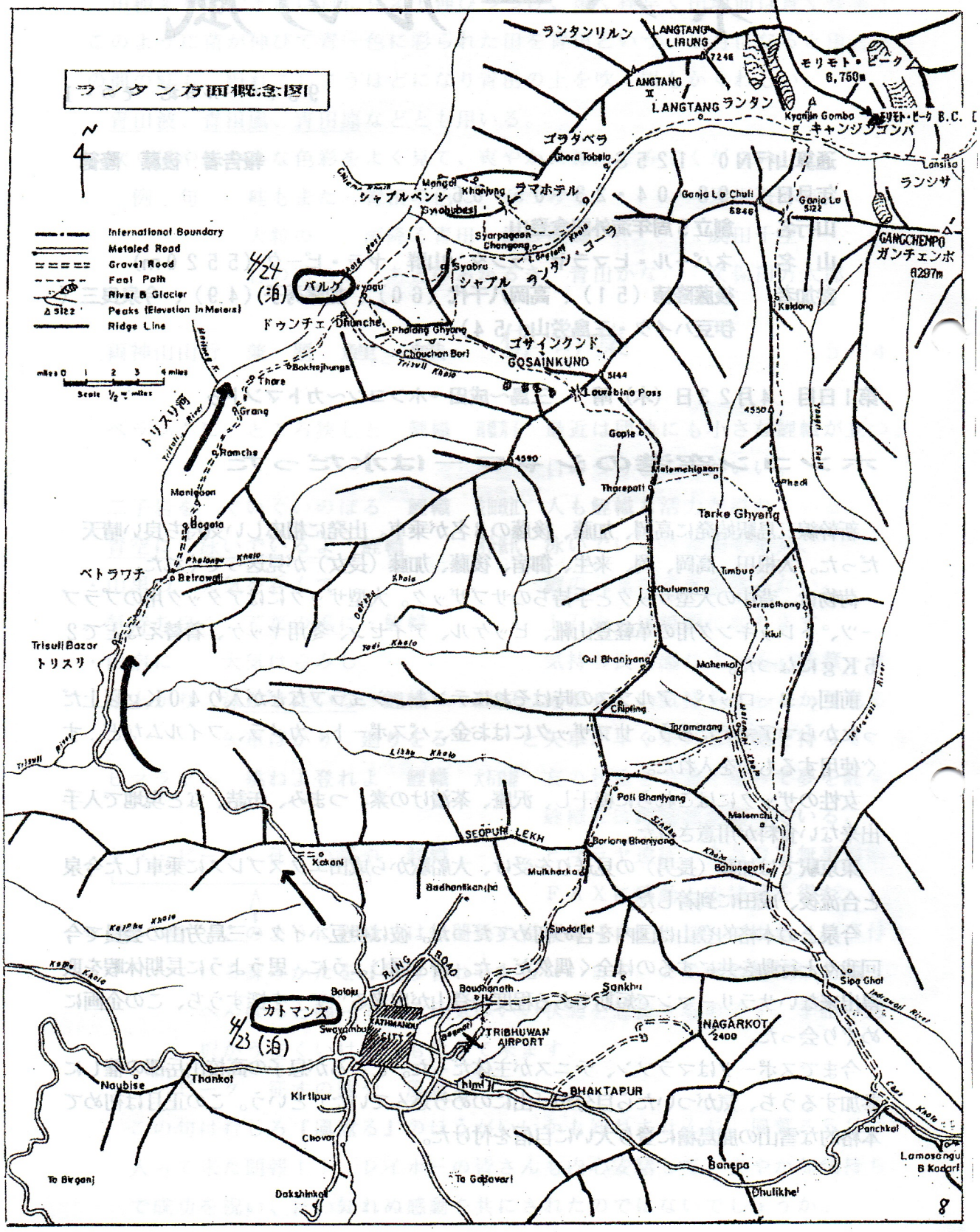
東京駅では加藤（長男）の見送りを受け、大船駅から成田エクスプレスに乗車した今泉と合流後、成田に到着した。

今泉との本格的登山は国内を含め初めてだつた。彼は伊豆ハイク・三島労山の会員で今回我々と行動を共にするのは全く偶然だった。皆と同じように、思うように長期休暇を取得出来ないサラリーマンで短期である程度の登山が出来るツアーを探すうち、この企画にめぐり会った。

今までスポーツはマラソン、テニスが主体だった。ところが息子の高校山岳部の催しに参加するうち、気がついたら自分が「山にのめり込んでいた」という。この正月は初めて本格的な雪山の鹿島槍に登り大いに自信を付けた。

カトマンドゥ～ランタン方面概念図

ヤラピークこれです。



このツアー主催者の「アルパイン・ツアー」の待ち合わせ場所にはすでに何人かの参加者と日本から同行するツアー・リーダーの一人、志小田清光がいた。さっそく名刺を渡し挨拶。彼は日本アルパインガイド協会に所属するプロのガイドで仙台に住み、仙台山岳会の会員。年齢は４２歳で３人の女の娘がいる。子供は全て大きな遠征の後に出来たとのこと。８千mはガッシャブルムⅠ峰（世界１１位・８０６８m）に一度登っているそうだ。アルパイン・ツアー社の社員でなく契約ガイド。数年前冬の剣で労山の「ぶなの会」遭難の手助けをしたと話していた。

参加者を見渡すと男性では私、女性では加藤が一番の若手。予想したことだが、いささかガッカリした。後で分かったことだが「日本の冬山」に一度も登っていない参加者がいたり「口あんぐり」だった。まがりなりにもヒマラヤ５千mの山である。ツアー会社の「員数、儲け主義」を垣間見た。

案の定、アタック日氷壁下でアイゼンが靴に合わず泣く泣く下山した参加者がいた。甘い言葉で誘った以上、事前に細部のフォローをすべきである。

キャセイ・パシフィック航空のジャンボ機でホンコンに向かう。久しぶりの飛行機で少し緊張した。私は飛行機があまり好きでない。そんな時は「飲むに限る」とビールと熱燗の日本酒を頂いた。皆も絶好調でにぎやかにやっていた。冷やの日本酒を貰いザックに忍ばしたり、ワインを水筒に詰めたり、チャッカリしたものだった。

■

やや蒸し暑いホンコンに到着。自動小銃を持った兵士が警備していた。ここで関西・九州方面の７名と合流しツアー参加者の１９名が揃った。

１９名中男性は７名、女性は１２名。平均年齢は正確ではないが６０歳位。ここでも女性、高年上位である。海外登山、ヒマラヤ経験者は多く、なかにはアコンカグアに３回目で登ったという「つわもの女性」もいた。総じて、金と暇がある「リタイヤ組」が多く我々のような「金も暇もない現役組」は少なかった。

ホンコンではネパール行きの飛行機の待ち時間が３時間あるので空港の中でヒマをつぶす。免税店など見て歩いていると、めざとい今泉が「シャワー」があることを発見。皆でさっそくトライする。

シャワーはトイレの横にあった。トイレには「トイレ番」のオジさんがいた。蛇口を開きお湯を出す。ところが待てど暮らせど「お湯」にならない。

オジさんに英語で話しても通じない。「ダメ、ダメ」というような身振りである。後で聞いた話では、この手の「トイレ番」には「チップ」をやる、とのことだが、まさかそのせいでお湯が出なかったとは考えにくい。

結局「水でもイイ」ことにし全員で浴びサッパリした。後はレストランで「ホンコン・ラーメン」を食べたり、ビールを飲んだりした。今泉がある程度英語が出来たので、注文は楽だった。

ロイヤル・ネパール航空のジェット機はやや小さいものだった。スチュワーデスは色黒

ランタン山群5,500m雪山登頂　14日間

98年

	月日(曜)	発着地名	時刻	交通	スケジュール（食事）	宿泊
01	4/23(木)	東京（成田）　発 香港　着 香港　発 カトマンズ　着 時差3H15	11:00 14:40 20:40 23:10	CX501 RA410	ツアーリーダー志小田清光（ｼｺﾀﾞ ﾐﾖﾐﾂ）と共にキャセイパシフィック航空にて東京（成田）発、空路、香港へ。 香港到着後、各地発のお客様と合流し、ロイヤルネパール航空に乗り継ぎ、ネパールの首都カトマンズ(1,300m)へ（ロイヤルネパール航空の都合により、通常より遅い発着時刻に変更となっております）。カトマンズの空港にてもう一人のツアーリーダー後藤眞理（ｺﾞﾄｳ ﾏﾘ）がお待ちしております。 （機）	ホテル
02	4/24(金)	カトマンズ　発 バルク　着	朝 夕刻	専用車 約8時間	朝、専用車でカトマンズ発。トリスリバザールを経由し、山腹の車道をドゥンチェを経て、段々畑の村バルクへ。 （朝・昼・夕）	テント
03	4/25(土)	バルク　発 バンブー　着	朝 午後	徒歩約 6時間	ゆるい巻道を登り、尾根を越えて谷の中のバンブーへ。 （朝・昼・夕）	テント
04	4/26(日)	バンブー　発 ゴラタベラ　着	朝 午後	徒歩約 6時間	深いランタン峡谷の中の道を登り、広い氷触のU字谷が開けるゴラタベラへ。 （朝・昼・夕）	テント
05	4/27(月)	ゴラタベラ　発 キャンジンゴンパ着	朝 午後	徒歩約 6時間	広く開けたU字谷を進みランタン谷を経て、ランタン山群の雪山と氷河に囲まれた中心地キャンジンゴンパ(3,840m)へ。 （朝・昼・夕）	テント
06	4/28(火)	キャンジンゴンパ 滞在			高所順応日、周辺トレッキング。ランタンリルンの氷壁や氷河などを間近に仰ぐゴンパ背後の好展望の丘(4,350m)または上部ランタン谷の往復など。 （朝・昼・夕）	テント
07	4/29(水)	キャンジンゴンパ発 ティキャブサ・ カルカ　着	朝 午後	徒歩約 3時間	ツェルゴ・リから下りてくる尾根を登り、ランタン山群の大パノラマを眺めながら、山腹の大トラバース道を進み、尾根上に放牧小屋が階段状に並ぶティキャブサ・カルカ(4,400m)へ。 （朝・昼・夕）	テント
08	4/30(木)	ティキャブサ・ カルカ　着 ヤラ・カルカ　発	 午前 午後	徒歩約 3時間	大パノラマの中を、さらに山腹のトラバース道を進み、ガンチェンポ、ヤンサツェンジなどを望むヤラ・カルカ(4,750m)へ。 （朝・昼・夕）	テント
09	5/01(金) 標高差770m	ヤラ・カルカ　発 ヤラ・ピーク登頂 ヤラ・カルカ　着	早朝 午前 午後	徒歩約 8時間	ヤラ・ピーク登頂日。斜面を登り、斜面を登り、万年雪の尾根の下の取付点の台地(5,300m)へ。ザイルを結び、シェルパガイドの案内で、最初は雪の急斜面から次いで広い雪尾根を登り、ヤラ・ピーク(5,520m)に登頂。ランタン山群、ジュガール山群からチベットまで360度のパノラマが展開します。その後往路をヤラ・カルカに下ります。 雪山登山を希望されない方は、ヤラ・カルカ西方の万年雪のないピーク、ツェルゴ・リ(4,984m)往復など。 （朝・昼・夕）	テント
10	5/02(土)	ヤラ・カルカ　発 キャンジンゴンパ着	午前 午後	徒歩約 3時間	登頂予備日。 その後往路をキャンジンゴンパへ下ります。 （朝・昼・夕）	テント
11	5/03(日)	キャンジンゴンパ発 カトマンズ　着	午前 午前	ﾍﾘｺﾌﾟﾀｰ 特別便	キャンジンゴンパからヘリコプター特別便でカトマンズへ。（飛べない場合はキャンジンゴンパにてテント泊） （朝・ー・ー）	ホテル
12	5/04(月)	カトマンズ　滞在			終日、カトマンズ滞在、またはキャンジンゴンパからのフライト予備日。オプショナルツアー市内観光や町の散策、ショッピングなどをお楽しみ下さい。 （朝・ー・ー）	ホテル
13	5/05(火)	カトマンズ　発 香港　着	09:45 16:25	RA409	朝、ロイヤルネパール航空にてカトマンズ発、空路、香港へ。 （朝・機・ー）	ホテル
14	5/06(水)	香港　発 東京（成田）　着	09:55 14:55	CX504	キャセイパシフィック航空にて香港発、帰国の途へ。午後、東京（成田）着。 （朝・機）	

(上) ダーバーホテルの食堂
(中) ダーバーホテルのロビー
(下) ダーバーホテル外観

で眼がエキゾチックだった。夜間飛行なのでまたまた不安だった。機外は真暗で何も見えない。瞬間止まっているような錯覚に陥り、平衡感覚がなくなり気分が悪くなる。カトマドゥの灯が見えたときはホッとした。２４日午前０時だつた。

第２日目　４月２４日（金）晴　　カトマンドゥ～トリスリ～バルク（１８５０m）

夜中のカトマンドゥ空港には子供の物乞い

夜中のカトマンドウ・トリバーン国際空港は閑散としていた。入国審査はちょっと時間が掛かった。スイスなどは審査はない。それでも愛想の良い係官が日本語で「コンバンワ、旅ハドウデシタ？」と話し掛けてきた。空港にはアルパイン・ツアーのもう一人のツアー・リーダーの後藤真理が待っていた。彼女はしばらくこちらに滞在していたようだ。リーダーから空港外に出たら荷物を見知らぬ人間にくれぐれも渡さぬよう注意を受ける。見知らぬ人間に荷物を預けると法外なチップを要求されたりするらしい。志小田はここでビザの取得。慣れればここでもＯＫである。

空港外は薄暗かった。これが国際空港だから電力事情は良くないのだろう。闇の中からどこからともなくゾロゾロと大人、子供が付いてくる。こんな夜中に一体この子供たちは何なのだろう・・・。大人は隙きあらば荷物を取って運ぼうとする。子供は眼をギラギラさせ「ギブミー・・・」と手を差し伸べる。どこからどこまでが関係者か分からず、まつたく油断ができない。

ようやく手配の車に乗り１５分程走り、今日の宿「ダーバー・ホテル」に入ったのは１時１５分だった。ホテルは赤レンガ造りの６階建で中級というところ。最上階にレストランとラウンジ、日本人経営の日本料理店がある。例によって階の呼称はヨーロッパ方式で日本の１階が０階と表示されているので、慣れないと戸惑う。

高岡、加藤は４階の向かいの部屋。持参のスリッパが調子良い。濁ったシャワーを浴び９０ルピー（以後ＲＰ・１８０円）のビヤをいただきベットにもぐった。今泉は机に向かいメモ。几帳面な人だ。長い長い１日が終わった。

■

ピイッ、ピイッ、ピイッ、ピイッ、ピイーッ。カトマンドゥの朝は鋭い警笛で始まる。のろのろと太陽が昇ると、どこからともなく人が「湧いて」くる。

街、道路、路地は人、４輪車、３輪車、耕運機、トラクター、力車、バイク、自転車、そして、牛、犬が溢れる。

騒音、警笛、埃、猛烈な排気ガス、牛糞、人糞、ゴミ、罵声、泣き声・・・。街は正に「何でもありの坩堝（るつぼ）」と化してゆく。

ここには少なくも、あのすばらしい「ビスターリ（ネパール語・ゆっくり、のんびり行こう）」の言葉は存在しない。

(上) カトマンドゥ市内
道路は未舗装
大雨が降るとあふれる
(中) バナナ、リンゴ、オレンジ、スイカが並ぶ果物屋
(下) アパート風の建物

ネパールは北海道の約１・８倍。民族は４０、言語７０。首都はカトマンドゥの人口は約１００万。標高は約１３００m。緯度は大体沖縄と同じ。時差は３時間１５分。通貨の１ＲＰは約２・２円。今年は「ネパール観光年」で新たに登山が出来る山が何座か発表された。

■

ホテルの朝食はバイキング方式だった。やや黒い歯ごたえのあるパン、こちらで取れるこぶりのバナナ、リンゴ、ヨーグルトはおいしく、スイカは色悪く甘くなかった。　皆食欲は旺盛。特に今泉は健啖。今日の行程はバスでバルクまで行くだけである。出発に先立ちホテルで３千円分ＲＰに両替した。かなり古いベンツのマイクロバスがホテルの庭に用意された。大きな荷物は屋根に乗せる。１９名のツアー参加者と２名のリーダー。そして何人かのシェルパが乗り込んで出発。

前述の「坩堝」の中をバスは物凄い騒音と埃を上げ、警笛で鳴らし強引に割り込んで突っ走る。見るもの聞くもの全て初めて目にするものだ。窓外を食い入るように眺める。カトマンドゥの第一印象はとにかく「汚い街」だった。

ゴミは道路に山積みにされている。道路に捨てる方式なのだ。それを犬があさる。女性がスコップでトラックに積んでいた。まだ「カースト制度」が残るネパール。その仕事は最も階級の低い者の仕事という。

街中の家の多くは粗悪な赤レンガを積み重ねた４～５階のアパート風の建物。１階は店舗になっている。今にも倒れそうな傾いた家も多く、窓ガラスはない。山小屋みたいな開閉式の木の扉である。

後日、甲府の河野仁美さんの知人でカトマンドゥでみやげ物と旅行代理店を営んでいるラジェンドラさん（男性・２４歳）の家に夕食を招かれた。比較的裕福な彼の家も同じような作りで、床は粘土、天井は私の背丈程の高さだった。

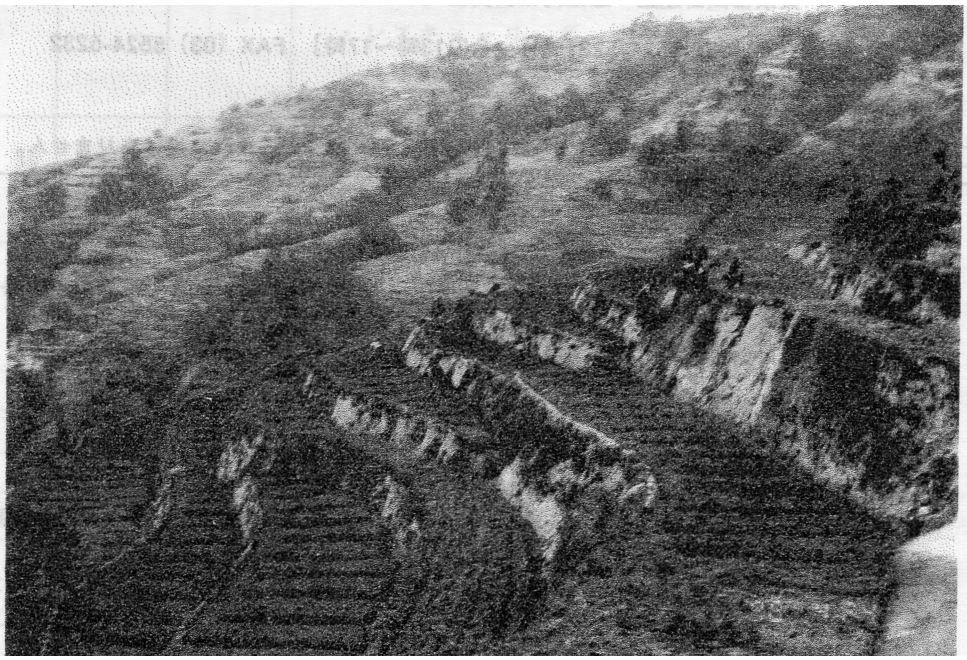
そして、何故か窓という窓から女、子供が痩せた顔を覗かせる。男達は手持ち無沙汰な感じで何人か家の前でトグロを巻いている。この風景はどこでも多く見られた。仕事がないのだ。ネパールは大学卒でもなかなか希望する職業に就けないと聞いた。

また、この国では今だ「男尊女卑」の風潮が強く、「女は人間（男）と家畜の間に位置する働くための動物」と言われるくらい女性の地位は低い。従って、どこの街、部落でも女性は働き、男たちはブラブラしている。

■

郊外に出ると見事な段々畑が続く。そこにはジャガイモ、麦などが植えてあった。ここでも畑仕事はほとんど女性だ。彼女等は民族衣装の「サリー」に似たスカートをまとい、ズルズルと引きずって畑仕事を続ける。山間部の水の少ないこの地で、洗濯はどうするのかと考えてしまう。

実は「洗濯」はほとんどやられないようだ。洗濯物はごく稀に民家に庭先に干されているだけだった。同時に「入浴」も同じことがいえる。従って現地の人々、シェルパ、ポー



上）我々がのったベンツのマイクロバス
下）段々畑はどこまでもつづく

ターは近づくと「猛烈な臭気」が漂う。久しく風呂に入っていない様だ。風邪で熱を出したときはこの匂いで頭がクラクラした。

無理もない、例え水があってもネパールは「燃料」が絶対的にない。燃料の多くは山の樹木に頼っている。従って山々はほとんど丸坊主で貴重なシャクナゲも切られていた。このため樹木は年間３％消滅しているという。

（つづく）